

令和 3 年 6 月 14 日現在

機関番号：24506
研究種目：基盤研究(C) (一般)
研究期間：2017～2020
課題番号：17K06752
研究課題名(和文) トルコにおけるアンリ・プロストの都市計画とミュゼ・ソシアルの役割に関する研究

研究課題名(英文) A Study on the Town Planning by Henri Prost and the Role of Musee Social in Turkey

研究代表者
三田村 哲哉 (MITAMURA, Tetsuya)

兵庫県立大学・環境人間学部・教授

研究者番号：70381457
交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：フランスの建築家・都市計画家アンリ・プロストは1922年の大火後、測量士・都市計画家のルネ・ダンジェとイズミルの都市計画を手掛けた。トルコは1935年にイスタンブールの都市改良のために設計競技を開催し、アルフレッド・アガシュとジャック＝アンリ・ランベール、ヘルマン・エルグーツの3名が都市の近代化に関する計画案を提案した後、プロストが1937年にイスタンブールの欧州側、1939年にアジア側、1941年に金角湾側に対する基本計画を策定した。本研究はトルコにおけるプロストの建築と都市に対する功績を明らかにしたものである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、20世紀前半のフランスにおいて前世紀までのものとは異なる新たな都市計画ユルバニスムに焦点を当て、その中心的な役割を果たしたフランスの建築家・都市計画家アンリ・プロストが手がけた事業の全容を解明する考察の一部に相当するものである。この4年度間の考察の対象はトルコの諸都市で、その建築と都市に対するプロストの功績を明らかにした。プロストはミュゼ・ソシアルの都市・農村衛生部会でも大きな役割を果たしており、考察の対象に含まれている。これまで見落とされてきた近代建築と都市計画の両面で学術的かつ社会的意義がある。

研究成果の概要(英文)：Henri Prost, French architect and town planner, formulated a master plan of urban planning for Izumir with Rene Danger, land surveyor and town planner, after the Great Fire in 1922. Though the competition on transformation of the city for Istanbul was held in 1935 and, Alfred Agache, Jacques-Henri Lambert, and Herman Ehlgotz presented proposal programs on modernization of the city, Prost formulated the final master plans for the western side in 1937, for the Asian side in 1939, and for the side of Golden Horn in 1941. It is made clear Prost's achievements in Turkey.

研究分野：建築史・意匠

キーワード：イスタンブール イズミル 都市改良 大火 コルニユデ法 「開発・拡張・美化」 アルフレッド・アガシュ ジャック＝アンリ・ランベール

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様式 C-19、F-19-1、Z-19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究は鉄筋コンクリート造と前衛芸術の影響に傾倒したフランス近代建築の史観に対する疑念に基づいて、近代建築に対して両者と同様に大きな影響を与えたと考えられる、20世紀の都市計画、ユルバニスムに焦点を当てた研究の一部である。フランスは国内のみならず、世界に点在する植民地や新首都、新都市で次々に都市計画を提案した。そのうち、数多くの都市で計画案が実施されたことがわかっている。

その中心的な役割を果たしたのが、フランス建築家・都市計画アンリ・プロスト(1874-1959)である。プロストはパリ国立美術学校で1902年にローマ賞を受賞後、ローマのフランス・アカデミーでコンスタンティノーブルのハギア・ソフィアの修復案を手掛けた後、帰国し、アントウェルペンの都市圏改造国際設計競技(1910)の1等案で、その名が知られるようになると、在日本国フランス大使館計画案(1912)の後、モロッコ初代総督ユベール・リヨテ(1854-1934)の下で、ラバトの新首都を含むモロッコ15都市(1913-22)の都市計画を手掛けた。その後の業績は都市計画に傾倒しており、ヴァール県コート・ダジュール(1922-39)、イズミル(1926)、パリ地域圏(1928-34)、モン＝ドール(1926)、サン＝ディエ(1927)、チュニス(1927-30)、メス(1928-31)、アルジェ(1930-36)、イスタンブール(1936-51)、ブルサ(1938-44)という、地中海の沿岸国、その主要都市における事業である。

1894年に元大統領らを筆頭とする社会経済主義エリート集団ミュゼ・ソシアルが創設され、パリ万国博覧会の会場計画を中心に開催に尽力した技師フレデリック・ル・プレー(1806-82)の影響を受けた者が労働問題、農業、保険、対外関係、住宅などの社会の諸課題を調査・検討するようになる。プロストは1908年にミュゼ・ソシアル内に設置された都市・農村衛生部会に所属し、ウジェーヌ・エナール(1849-1923)、ジャン＝クロード＝ニコラ・フォレスティエ(1861-1930)、アルフレッド・アガシュ(1875-1959)、アルベール・パランティ(1877-1953)、エドゥアール・ルドン(1862-1942)、アンドレ・ベラル(1871-1948)、ジャン＝マルセル・オピュルタン(1872-1926)、エルネスト・エブラール(1875-1933)、レオン・ジョスリー(1875-1932)とともに、フランス都市計画家協会の設立やフランス初の都市計画法制定に尽力した。このようにミュゼ・ソシアルは、前世紀の都市改良とは異なる20世紀前半の新たな都市計画の推進の母体となる大きな役割を果たした組織である。

本研究は、20世紀前半のユルバニスムで中心的な役割を果たしたプロストの功績を明らかにする作家論に、その考案の母体となったミュゼ・ソシアルの役割に関する考察を加えることにより、近代建築に対して大きな影響を与えた新たな都市計画の一端を明らかにする試みの一部で、トルコ諸都市を研究対象にしたものである。

2. 研究の目的

アンリ・プロストは上記の通りに地中海沿岸国の建築と都市に尽力した。プロストが事業を手掛けた地域はモロッコほかの北アフリカ諸国、パリ地域圏をはじめとしたフランス国内、イスタンブールを中心としたトルコの3つの地域に大別できる。本研究はとを踏まえた上でを対象としつつ、プロスト研究の総括として、フランスによる保護政策が展開されたモロッコ、都市の中心部を保全して城壁の外側の開発を試みる都市拡張、不良地区と遺産地区などが混在した規模の大きな都市の改良事業という、都市計画を実施する上でいずれもそれぞれまったく異なる背景や目的が定められている中で、プロストが貫徹した歴史主義に基づく建築と都市に対する功績を明らかにすることである。

本研究はプロストによるイスタンブールにおける全事業の解明に基づいた史実の確認、プロストの方針、アタトルクの考え、ミュゼ・ソシアルにおける議論、フランス政府の意向を把握、プロストが手がけた都市計画及び各事業に関する分析、トルコにおけるプロストの功績と設計理念の解明という4つの段階を経て進められるものである。本研究は、建築史家ルイ・オートクール(1899-1970)やジャン・ロイエ(1903-81)らによる論考や記事、ゼイネブ・チェリクやシベル・ポズトガンらによるトルコ近代建築に関する論考のほかに、プロストが育成したイスタンブール最初期の都市計画家アロン・エンジェル(1916-2010)のモノグラフ、シェネル・オズラーによるイスタンブールの都市計画に関する報告書、ジャーナ・ビルセルによる国際会議の報告書、イペク・アクピナーやカリオピ・アミダルウーによる近代トルコ建築に関する考察、ジャネット・R・ホルン、コレット・シャンペラン、スザンナ・マグリらによるミュゼ・ソシアルに関する研究などを踏まえて計画・立案したものである。

3. 研究の方法

本研究は厳密な資料に基づいて史実を明らかにする建築史、建築・都市の造形、空間、構成を解明する建築意匠、都市の成り立ちやその形成を主題とした都市計画という3つの視点から、20世紀前半のフランス建築・都市を解明する試みの1つで、書簡や文書の解読、政治・行政資料を含む文献調査、計画案の図面分析や作品分析、ミュゼ・ソシアルにおける議論解読、実地

調査を適宜組み合わせることで遂行したものである。本研究で使用した資料は、フランス国立文書館（パリおよびピエールフィット＝シュルーセーヌの両館）、フランス国立建築・遺産博物館 20 世紀建築資料センター（パリ）、ミュゼ・ソシアル図書館（同左）、フランス・アナトリア研究所図書館（イスタンブール）、イスタンブール考古学博物館、アタトゥルク図書館（イスタンブール）、イズミル市立文書館において収集したものである。このうち最も重要な資料はフランス国立建築・遺産博物館 20 世紀建築資料センターの Fonds Henri Prost に保管されているイスタンブール、イズミル、ブルサに関する資料と、全 10 巻からなるプロストの文書選集、ミュゼ・ソシアル図書館に保管されている都市・農村衛生部会の議事録と論文の掲載された機関紙、フランス・アナトリア研究所に保管されている文書選集の一部および報告書、アタトゥルク図書館に保管されているイスタンブールに関する資料である。

4. 研究成果

本研究の主な成果は、トルコにおけるアンリ・プロストの功績に関する考察と、ミュゼ・ソシアルがコルバニズムにおいて果たした役割に関する分析を中心に次の 4 点に大別できる。第 1 は、プロストがイズミル、イスタンブール、ブルサの都市計画を手掛けるようになる第一次大戦以前に遡り、イスタンブール考古学博物館に保管されているスケッチ集（Croquis, Hagia Sophia, Prost, 14781）を用いて、ローマのフランス・アカデミー滞在 3 年目と 4 年目に手掛けたハギア・ソフィア大聖堂の修復案に関する考察を行い明らかにした次の諸点である。

プロストは、都市計画の功績と照合すると、建築史家ケネス・フランプトン（1930-）が指摘するように、「工業都市」（1904）を描いたトニー・ガルニエ（1869-1948）の影響が大きいと言えるが、本人の関心はローマに滞在する以前からすでにイスタンブールを中心としたオリエントにあり、ローマ滞在 2 年目にトルコ・コンヤにおいてイブラヒム・モスクのミフラブを報告している。プロストは晩年にイスタンブールの都市計画を手掛けるようになるが、その当時から関心を寄せていたことがわかっている。こうしたオリエントへの関心は、在日本国フランス大使館案の策定を引き受けた点からも明らかである。

念願のビザンティン芸術を追求する機会が得られるまでの経緯を明らかにした。イスタンブール博物館（現・考古学博物館）の創設者で初代館長のオスマン・ハディム・ベイ（1842-1910）、フランスの考古学者で学芸員のギュスターヴ・マンデル（1873-1938）、元在ローマ・トルコ大使トゥルハン・パシャ（1839-1927）、イタリアの建築家ライモンド・ダランコ（1857-1932）の助力を得て、1905 年にローマのフランス・アカデミー館長カロリウス・デュラン（1838-1917）を通じ、オスマン朝スルタンの勅令を要求するという公式な手続きを経て調査が実現したこと、調査対象が図面の作成、写真の撮影、寸法の把握の 3 点のみが許可されたことなどを明らかにした。

こうした調査に基づくスケッチ集の当時の評価である。過剰なほどの情熱が注がれたとされる調査報告は高い評価を得ている。前世紀よりオリエントに関心を寄せていた建築史家のオーギュスト・ショワジー（1841-1909）を刺激し、再度の現地調査を検討していること、1909 年にスパラトのディオクレティアヌス宮殿を報告したミシェル・エブラール（1875-1933）とともに再調査のための予算を美術省に請求していること、1910 年に建築アカデミーから賞賛を得るとともに、1911 年にフランス芸術家サロンで受賞、パリ・ジャーナルヤル・フィガロ、イスタンブールなどの一般紙で紹介されたこと、考古学者で美術史家のジャン・エベルゾル（1879-1933）と若手建築家のアドルフ・ティエール（1878-1957）が美術省の助成事業であるビザンティン教会堂に関する現地調査に参照していることなどを明らかにした。

スケッチ集の全体像の把握と、ハギア・ソフィアの図面の寸法の解読を中心とした修復案の解明である。プロストは大型の断面図を含む 30 枚の壮大な図面を残しているが、これらは各部の寸法を調査した成果物である全 6 冊のスケッチ集（1 冊目から 5 冊目が横約 37 センチ×縦 25.5 センチ、6 冊目が横約 52.0×縦約 36.5 センチ）に基づいたものであり、「第 1 ギャラリー」、「第 2 ギャラリー」、「正面 縁飾り 西 - 北」、「正面 縁飾り 東 - 北」、「さまざまな控え壁」、「1 階」、「無題」と題された全 372 点の平面図、立面図、断面図に、詳細図、柱割、控え壁などの寸法と形状が記されているもので、基本図ばかりでなく細部に関する調査も残しており、オーダーの柱頭を描いた図面は寸法調査によるものと考えてよい。これら全 6 冊からなるスケッチ集は、弟子のロイエがパリでトルコ大使を通して所有権がトルコ政府に移管されることになる。

これら 4 点が示す通り、プロストはオリエンタリズム、その中でもとりわけビザンティン芸術、イスタンブールに情熱をもって関心を寄せていたこと、近代主義の建築・都市よりもむしろ古代・中世に着目していたこと、さらにプロストはこのハギア・ソフィア本体に関する調査報告とは別に後に、アルフレッド・アガシュの提案に基づいた「考古学公園」に指定されることになるトプカプ宮殿の南側に位置する 6 世紀の都市の調査の成果も描き残しており、建築と都市の両者に関心を寄せていたことが考えられる。

第 2 は、トルコ革命後の主な都市事業は、共和国初代大統領ムスタファ・ケマル・アタテュルク（1881-1938、在位 1923-38）の下で、フランスとドイツからそれぞれ 3 名の建築家を招聘して開催された新首都アンカラの都市計画の設計競技（1923）およびその事業展開（1924-32）と、古都イスタンブールの都市計画の設計競技（1935）およびその事業展開（1936-51）である。このうち主な考察の対象はイスタンブールの都市計画及び都市改良で、次の諸点を明らかにした。

アンカラの設計競技にはドイツの建築家ヘルマン・ヤンセン（1869-1945）、ジョゼフ・ブリックス（1859-1943）、フランスの建築家レオン・ジョスリー（1875-1932）、イスタンブールの設計競技はフランスの建築家アルフレッド・アガシュ、プロストが推薦したジャック＝アンリ・ランベール（1884-1961）、ドイツの建築家ヘルマン・エルグーツ（1880-1943）を招聘して設計競技を開催し、アンカラではヘルマン・ヤンセンが、イスタンブールでは設計競技に参加しなかったプロストがそれぞれ担当者となる背景を明らかにしつつ、諸案を参考に、プロストが手がけた都市計画に関する考察を進めた。プロストの選出は1936年のアタトゥルクの意向に基づいてイスタンブール市から依頼されたものである。プロストによる提案は「欧州側」（1937年10月17日）、「アジア側」（1939年1月6日）、「金角湾」（1941年5月10日）の基本計画（Plan directeur）で、提案された内容は道路、鉄道、航海、建設、法制、航空、商業、食料、スポーツ、記念建造物、防衛などの多岐に渡っており、このなかにはモロッコ諸都市やイズミル、ヴァール県コート・ダジュール、パリ地域圏、メスなどのこのほかの都市にない稀な項目まで含まれていたことを明らかにした。

ミュゼ・ソシアルにおける議論の中で生み出された20世紀前半の都市計画、コルバニズムを象徴する要語「開発」「拡張」「美化」は、1919年に制定、1924年に改正されたフランス初の都市計画法、コルニユデ法に用いられたもので、フランス諸都市ばかりでなく、植民地や保護領などで適応された、提案の基本となる概念であり、プロストは地中海沿岸の都市でさまざまな都市事業を手掛ける中で、モロッコを除く、それ以外の都市において本法に基づく提案を遂行してきた。しかし、18世紀以降に列強の侵略や干渉で危機に瀕し、近代化改革を迫られて遂行した19世紀のタンズイマートに由来するイスタンブールの都市改良は、開発や拡張、美化とは異なり、イズミルですでに事業を手掛けた実績のあるプロストにとっても初めての経験で、まず最初に諸課題の解決が求められた背景を明らかにした点である。これらはイスタンブールという都市特有の諸背景に基づくもので、ボスポラス海峡による都市の分断、すでに発達した大きな都市の規模、多発に悩む火災への対応、差し迫る乱開発への対処が求められており、廃屋の除去や土地の造成、丘陵の植林、後背地の応急処置に始まったことを明らかにした。

国際植民地・熱帯諸国都市計画会議が1931年パリ植民地国際博覧会の会期中である10月10日から同月15日にパリで開催された。本会議はリヨテ、プロスト、ロイエが中心となり、植民地と熱帯諸国における新たな都市計画、コルバニズムを主題としたもので、「風俗や習慣の異なる人種が暮らす都市の最も良い配置を定義すること」を目標に掲げて再際されたもので、全6点にまとめられた報告「植民都市と熱帯都市の開発」「美学の課題」「居住」「保健・衛生」「都市と地方の法律」「都市の具体案の実行性」の1つが都市計画の法制度であった。プロストは、本国ですらコルニユデ法が制定されていない第一次大戦以前のモロッコにおいて15都市の都市計画を手掛けた経験があり、その必要性を痛感していたようである。1937年4月15日にイスタンブール市長に対してパリと同様にイスタンブール地域圏の開発を主体とした地域計画の目的にはじまる全64項目に及ぶ法案を主張したのはそのためである。

こうしたプロストの法制度に関する方針に基づいて、建築線と地役権は街区形成の基本で、都市計画に必要な壁面線の計画と建築制限の導入、建築許可等の制度整備に対応した臨時措置と都市計画の実施に向けた体制の検討が示され、本国と同様にコルニユデ法と同じ「開発」「拡張」「美化」に基づいた計画法（PAEE）の住宅群や分譲地が考案されるようになるとともに、水道、ガス、電線を考慮した新たな道路網の開通、土地所有者の組合の認可と道路及び区画への関与、乱開発や荒廃地に対応した不衛生を理由とする収用が次々に実施される体制が形作られた。プロストはこうした都市計画の法制とともに、道路整備、工業地域、行政権限、保全地、地役権、高速道路、大学都市などの多岐に渡る主題に対しても立法を提起している。基本計画はこうした法制度の確立とともに進められたものであった。欧州側で1936年から翌年に策定されたものは、「鉄道と海上交通」「食料供給」「市場」「手工業」「産業と商業」「地所」「近代建築と衛生規則」「郊外地」「考古学研究、遺跡、記念建造物」に関する調査に基づいて北側のガラタ港の拡張、南側対岸のサライ・ブルヌ港（現・エミノニユの東側）の整備、ガラタ橋の架け替えと広場の整備、アタトゥルク橋の建設、商業・工業地域を目指した金角湾の整備という5点の対象地域は金角湾の周辺部に位置しており、南北の交通と湾内および沿岸部の産業育成を視野に入れた提案であった。こうした提案は、沿岸の港や橋ばかりでなく国外の主要都市を結ぶアタトゥルク大通りの南端の国際鉄道駅舎、電車による国内線を想定したシルケジ駅舎、欧州とアジアを結ぶ交通網、鉄道と客船を結ぶ駅舎と港湾の連絡に及び、それらのために必要な施設はイエニカプ、イエディクル、バクルキョイのほか、マルマラ海に面した南側の沿岸部に設置することが検討された。そのうち主な建築の提案は、保全と開発の組み合わせによる市場と、大学および高等学術機関で、ともに公園と関係付けた配置が示された。後者の中心に位置する国立図書館は、当初より建築が具体的な検討課題であったことを示唆している。

プロストによるイスタンブールの都市改良ではさまざまな知見が得られるが、その要点は次の通りである。プロストはまず立法に着手して都市改良を潤滑に推進する基盤を固めた上で、これまでに経験のない複雑な地形の都市の検討、都市計画で前例のない新たな提案、都市改良以前のイスタンブール特有の諸課題の解決に対処する一方、本国と同様の都市計画の方針の導入、数多くの大型建設事業の促進、歴史・文化を継承するための遺産の保存事業など諸課題に対して取り組み、郊外地だけではなく市街地、短期的な問題ばかりでなく長期的な視点に立脚した事業、近代主義に傾倒した開発のみならず歴史主義を尊重した保全という、全体の均衡が

保たれた都市改良を展開した。プロストは過去の実績に囚われず、新たな事業に挑むことにより、こうした形でトルコに都市の近代主義を輸出する役割を果たした。

第3は、イズミル市立文書館に保管された史料に基づいて、プロストが1913年より従事したモロッコ15都市の都市計画を終えた後、手がけたイズミル大火後の都市計画について次の諸点を明らかにした。

大火とその後の都市についてである。アタトゥルクが第一次大戦中にギリシャに占領されたイズミルを奪還した1922年9月13日に、イズミル市内の中心地が大火に見舞われ、被害は約300haにおよび、4分の3に相当する約20,000-25,000棟の建築を焼失、ギリシャ人は海を渡って目前の母国に戻ったが、アルメニア人とレバント人が家を失いつつも居残ったようである。国家事業として実施されたアンカラとイスタンブールの都市計画において「トルコ人」の一義的な定義すらない困難な多民族国家トルコにおける近代国家の安定統治のために、オスマン帝国による緩やかな都市の統治から脱却し、ドイツとフランスから最新の都市計画を輸入しようとしたが、イズミルはその先例としてアタトゥルクの依頼を受けてリヨテが紹介したプロストがフランスの測量士で都市計画家のルネ・ダンジェ(1872-1954)とともにイズミルの都市計画を手掛けた点である。

こうした都市において、メディナの原住民と新市街の入植者が共存・共栄する都市を成功させたプロストへの期待は高かったと推察される。プロストが手がけた具体例は、エーゲ海に面する海辺広場コルドン、1923年に開催された博覧会跡地を緑化・整備し直した「文化公園」、中心市街地の再建や幹線道路網の整備、東側の工業地帯や北側の港湾、造船所および埠頭の建設、郊外団地や労働者住区の充実で、「文化公園」からコルドンに抜ける街区は大きく、パリのある一地区のような街並みが計画された。一方、その北側と南側に残された、商店などが連なる大火前の小さな街区の保全もプロストの功績である。

イズミルの都市計画は、アタトゥルクが歴史ある都市の分断を克服して、近代国家の都市モデルを狙ったものであるが、プロストは、大火を免れたスミルナの北東部とパゴスの北側一帯に対する提案を避けて保全したため、トルコ人らによる旧来の街区と欧州人による新市街という2つのエリアの分断が続くこととなり、歴史的な都市の分断の改善か、建築・都市の保全かという、歴史主義者プロストの判断はアタトゥルクの狙いに反したものとなる。この事態を失敗と捉えたイズミル市は、1938年に革新的な都市計画を期待して、ル・コルビュジエ(1887-1965)にアテネ憲章に基づいた全体計画を依頼したが、それも完全に受け入れられることなく失敗に終わった。都市の分断の解決を模索する2例を比較した成果である。

第4は、ミュゼ・ソシアルがトルコの都市計画に果たした役割に関してである。プロストがモロッコやパリ地域圏について報告したように、ミュゼ・ソシアル内に設置された都市・農村衛生部会に所属する建築家・都市計画家・造園家、さらにフランス都市計画家協会に所属するものをはじめ、国内外において手掛けたコルニユデ法に基づく事業を中心に、その成果を会議や集会で発表し、意見交換を行う機会が設けられている。イズミル、アンカラ、イスタンブールいずれの事業の場合も、ミュゼ・ソシアルが果たした最も大きな役割は、イズミルを手掛けたプロスト、アンカラの設計競技に参加したジョスリー、プロストの推薦でイスタンブールの設計競技に参加したランベールいずれもが、上記いずれかの組織に所属し、国内外で活躍する建築家・都市計画であった点から明らかな通り、ユルバニスムという新たな都市計画の考案からその実現に至るまで、コルニユデ法の制定やフランス都市計画家協会の設立、雑誌「ユルバニスム」の創刊、1923年のストラスブール、1931年のパリほかの国際会議や展覧会の開催、教育・研究機関の創設などを通して、建築家・都市計画家が集まる母体という役割を果たしていた点にある。プロストによる都市計画はモロッコに始まる。北アフリカの西側から地中海を縦断する形で展開されたユルバニスムに基づく都市計画事業は晩年、その東端のイスタンブールに至るが、そのいずれの事業も関与の形態はさまざまであるが、ユルバニスムという新たな都市計画の母体となったミュゼ・ソシアルの影響を受けたものと考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 三田村哲哉	4. 巻 -
2. 論文標題 ミュゼ・ソシアルとユルバニスム	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本建築学会大会学術講演梗概集 建築歴史・意匠	6. 最初と最後の頁 515-516
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 三田村哲哉	4. 巻 -
2. 論文標題 アンリ・プロストのハギア・ソフィア大聖堂修復案	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本建築学会大会学術講演梗概集 建築歴史・意匠	6. 最初と最後の頁 305-306
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 三田村哲哉	4. 巻 -
2. 論文標題 イスタンブールの都市改良とアンリ・プロストの文書選集に関する考察	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本建築学会大会学術講演梗概集 建築歴史・意匠	6. 最初と最後の頁 627 - 628
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計1件

1. 著者名 松原 康介	4. 発行年 2019年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 400
3. 書名 地中海を旅する62章	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------